

序にかえて — 各章の意図と関連性 —

筆者は日本中世史を専門としており、古代史の専門的な教育を受けてはいない。このような古代史論文を書くことになったのは、あとに述べるように、偶然の事情があったからである。

本書は、学術研究書のように本格的な意図の下に研究・執筆したものではなく、その時々興味関心から自論を展開したものである。したがって、専門研究書の「序論」のような、研究史の整理とか自書の位置づけなどは、当初から意図がなく、またそのような能力も持ち合わせていない。本書の研究史上での位置づけは、評価してくださる読者や研究者の方に委ねたいと考えている。

研究書の冒頭としては相応しくないが、ここでは、各章を執筆した個人的契機・経緯も述べさせてもらい、併せて意図、内容、各章の関連性を簡単に紹介して「序」に代えたいと思う。

本書の最大の特徴は、一つの地域、一つの氏族に焦点を当て、そこから広がる問題を考えまとめたものである。その点では各章は密接な結びつきを持っている。

出発点となった一つの地域とは「下総国猿嶋郡」であり、一つの氏族とは八世紀から一〇世紀にかけてそこで活動した「猿嶋安倍氏」なる氏族である。この地域と氏族が、タイトルとした『平将門の乱と蝦夷戦争』に深く関わって

くるのである。

第一章「鎮守副將軍安倍猿嶋臣墨繩の故地をめぐって」（初出一九九七年）は、桓武朝第一次蝦夷戦争に登場する「鎮守副將軍安倍猿嶋臣墨繩」（『続日本紀』）と、この人物の故地と推定される水海（茨城県古河市水海）を検討したものである。研究のきっかけは、当時の猿島郡総和町（現古河市）の自治体史編纂に参加しており、原始・古代・中世部会には古代史の専門家が加わっておらず、筆者が中世分野とともに担当することになったことにある。本章はその過程で考えたことを委員会の雑誌『そうわ町史研究』に発表したものである。

その時、研究課題となった一つが『続日本紀』に見えるこの人物の問題であった。「安倍猿嶋臣墨繩」は、旧姓を「日下部」といい、「猿嶋臣」とあるように猿嶋郡に本貫を有した人物である。当時の光仁朝中央政府から「安倍猿嶋臣」の改賜姓を受け、のち桓武朝期に鎮守副將軍として蝦夷戦争（三十八年戦争）、とくに第一次戦争において蝦夷首長・阿弓流為と北上川渡河戦で相まみえた、東北計略史上でも著名な人物である。しかしこの人物の出身地は猿嶋郡のどこであるのか、それが当時必ずしも明らかになつてはいなかった。その問題を考え始めたとき、以前の古文書調査で、水海の旧家の近世絵図に、近代に「釈迦沼」と呼ばれた隣地が「日下部沼」と表記されていたことを思い出し、この水海や周辺が「日下部氏」「安倍猿嶋臣墨繩」の故地ではないかと考えたことが始まりである。ただ古代のこの地域はそれまで古代葛飾郡域に入ると考えられており、その既成概念を外して考えたのが本章である。

内容は、日下部氏の本拠と同様、従来位置の不明であった猿嶋郡衙の所在地を、「コオリノヤマ」地名と発掘成果から同じ古河市水海に比定し、「安倍猿嶋臣」への改賜姓に先立つ神護景雲三年（七六九）の、猿嶋郡衙が焼けた「猿嶋郡神火事件」（『続日本紀』）を日下部氏による現任郡司降ろしの放火事件、そして水海を日下部氏によって移転された新置郡衙、日下部氏を新たな猿嶋郡司と考えた。そして「安倍猿嶋臣」への改賜姓を光仁朝政府による「神火

問題」責任反故宣言と見て、その理由を、直後に開始された三十八年戦争での、陸奥鎮守府⇨多賀城への軍需物資輸送を期待された故とするものであった。その際、関東の二大河川水系の最近接点という水海の立地条件（常陸川水系の最奥港津）に留意し、旧利根川水系の古河から水海を中継した関東一円からの軍需物資水上輸送という想定を、つぎの検討課題とした。

「関東の二大河川水系の近接地域」というのが本書各章に通底する地域条件で、重要なキーワードである。「関東の二大河川水系」とは、近世初頭の利根川東遷事業以前に、東京湾に流れ込んでいた旧利根川水系と、霞ヶ浦に流れ込んでいた現在の利根川中下流部の常陸川水系のことを言う。当時中世東国史で盛んに議論されていた水上交通論において、「二つの内海」（武総の内海〈東京湾〉・常総の内海〈霞ヶ浦・北浦など〉）とともに頻繁に使用された用語である。日下部氏一族の改賜姓の理由を考えていた当時、二大河川水系を跨いだ軍需物資輸送という想定が頭に浮かんだときは、興奮して同じ部会の畏友村上慈朗氏（考古学）の勤務先まで電話したことを昨日のこのように思い出す。

第二章「征夷事業における軍需物資の輸送について」（初出一九九八年）は、第一章での課題を検討しようとして、関東全域を対象にして論を展開したものである。ちょうど勤務先が、それまでの県立高校から茨城県立歴史館の方へと異動になり、そこでの館報に載せたものである。

当時志田諄一氏らによって陸奥への軍需物資（軍糧・武器・武具など）の水上輸送論が提起されていたが、まだ常陸国などの沿岸国からの研究に止まっていた「志田一九九一」。それに対し、関東内陸部の二大河川水系を跨ぐ輸送という視点で猿嶋郡司安倍氏（以下、「猿嶋安倍氏」と略す）の右の問題を検討してみようとしたものであった。

まず二大河川・内海交通の基礎構造を考古資料から想定し、そこでの猿嶋郡の交通的位置の検討を第一とした。考古資料としては軍需物資輸送に時期的・階層的に最も近い後期・終末期古墳石材を取り上げ、その分析の結果、猿